



サンショウクイの2つの亜種

サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* は平地から山地の落葉広葉樹林で繁殖するスレンダーな野鳥であり、ヒリヒリヒリ…という鳴き声から、「辛い山椒を食べた(山椒は小粒でもピリリと辛い)」と連想し、この和名がついたと言われています。

日本では2亜種が記録されており、亜種サンショウクイ *P. d. divaricatus* は日本では夏鳥として渡来し、主に本州～九州で繁殖し、フィリピン・インドネシアなどの東南アジアで越冬します。一方、亜種リュウキュウサンショウクイ *P. d. tegimae* は主に琉球諸島で繁殖・越冬します(日本鳥学会, 2012)。



▲亜種リュウキュウサンショウクイ 2014.2.11 まんのう町大口
PHOTO©末久章子

亜種サンショウクイの激減

亜種サンショウクイは、1970年代までは少ないながら普通に夏鳥として渡来・繁殖していました。

ところが1980年代から全国的に減少しはじめ、1990年代にはほとんど姿を見かけなくなりました。

香川県でも「1970年代に琴平山や高松市の藤尾山など各地に普通に生息していたが、最近は極端に減少している。」(2004. 香川県)とされ、県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅰ類、日本としても絶滅危惧Ⅱ類に位置づけられています。

サンショウクイをはじめとする森林で繁殖する夏鳥は1980年代以降から減少しており、1990年代には激減と感じられるほどで、当時「夏鳥たちの歌は、今 利尻島から西表島まで102人の緊急レポート」という本も刊行されるほどでした。この減少については、当時繁殖地である日本の森林には大規模な改変がなかったことから、インドネシア(ボルネオ島)で1982～83年に起こった大規模な森林火災が原因とも言われています(Higuchi & Morishita, 1999)。この森林火災では約360万ヘクタール、実に青森県の3.6倍の面積が焼失したと言いますので、そこを越冬地としていた野鳥には壊滅的な打撃だったと思われます。キビタキやオオルリは少ないながらもまだ繁殖していますが、亜種サンショウクイはほとんど回復せず、現在では主に渡りの時期に見る程度になってしまいました。

亜種リュウキュウサンショウクイの分布拡大

その一方、亜種リュウキュウサンショウクイは1969年に宮崎県で記録されたのを皮切りに、1970年には宮崎県で繁殖、1980年代後半には宮崎県・熊本県、1990年代には大分県・福岡県そして愛媛県、2000年代の前半には、高知県・広島県、2005年以降は佐賀県・長崎県・奈良県・香川県で確認されており、

どんどん分布が北上しています(香川県では 2010 年 9 月に紫雲出山あたりで記録があるそうですが、当時の支部報をみても見つけれませんでした)。

この亜種リュウキュウサンショウクイの分布拡大については、NPO 法人バード・リサーチの三上さんらが詳しく調査しており(三上&植田 2011)、次のように整理しています。

- ・亜種サンショウクイの方が北の地域で繁殖するが、亜種リュウキュウサンショウクイの方が北の地域で越冬することから、両亜種の分布の違いは寒さへの生理的耐性では説明できない。
- ・1980 年代に亜種サンショウクイが減少し、空いた地域で亜種リュウキュウサンショウクイが夏に繁殖できるようになり、さらに越冬するようになったものと示唆される。
- ・環境条件から推定した生息可能域は、関東地方にまでおよぶことがわかった。

また、亜種リュウキュウサンショウクイは越冬期に、エナガなどカラ類と混群を形成するようです。夏季の沖縄でもカラ類やメジロ、コゲラと混群を形成するようですので、特に寒さが理由ではなく、亜種リュウキュウサンショウクイの習性として、混群を好むのでしょう。

近年の香川県での亜種リュウキュウサンショウクイ

さて、香川県では昨年 2013 年初め以降、亜種リュウキュウサンショウクイの確認が続いています。

2013 年 2～3 月頃	栗林公園	「今季はあちこちで出沒しているようです」、	木谷重信 (木谷・榮川, 2013)
2013 年 2～3 月頃	琴平山	「エナガの群れと一緒に付かず離れずに移動していました。」	榮川政彦 (大川, 2013)
2014 年 1 月 19 日	琴平山	4 羽	日本野鳥の会香川県支部 定例探鳥会(十一, 2014)
2014 年 2 月 11 日	まんのう町	エナガの群と行動	末久章子 (古市, 私信)

このように越冬期に集中し、またエナガの群に混じっているようです。

亜種リュウキュウサンショウクイの記録は冬季が多らしく、発見率が高くなるのか、冬季に分散しているのかは不明ですが、いずれにしても今後、香川県で繁殖する可能性も高いと思われます。

三上氏は、各データから「越冬地の方が、標高が低く、暖かい場所」、また「繁殖地、越冬地ともに、植林地植生が多く、具体的には、山地のスギ・ヒノキ植林であった」としていますので、香川県で繁殖するとすれば、やや標高の高い讃岐山脈のスギ・ヒノキ植林でしょうか。

亜種サンショウクイの減少は残念でなりませんが、一方で亜種リュウキュウサンショウクイが拡大していることを見れば、私たちは野鳥のダイナミックな分布変化に現場に立ち会っていることになります。

香川県でも、今後の状況を丁寧に記録する必要があるでしょう。

・古市幸士, 2014. 私信

・Higuchi, H. & Morishita, E. 1999. Population declines of tropical migratory birds in Japan. Actina 12: 51–59.

・十一正雄, 2014. 第 379 回 定例琴平山探鳥会報告, かいづり(362)2014 年 3 月号、日本野鳥の会香川県支部

・香川県希少野生生物保護対策検討会, 2004.3.「香川県レッドデータブック 香川県の希少野生生物」, 香川県環境・水政策課

・木谷重信・榮川政彦, 2013. かいづり(表紙・リュウキュウサンショウクイ). かいづり(350)2013 年 3 月号、日本野鳥の会香川県支部

・三上かつら・植田睦之, 2011. 西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. Bird Research Vol. 7, pp. A33–A44

・日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第 7 版. 日本鳥学会

・大川庫弘, 2013. リュウキュウサンショウクイ現る. かいづり(350)2013 年 3 月号、日本野鳥の会香川県支部